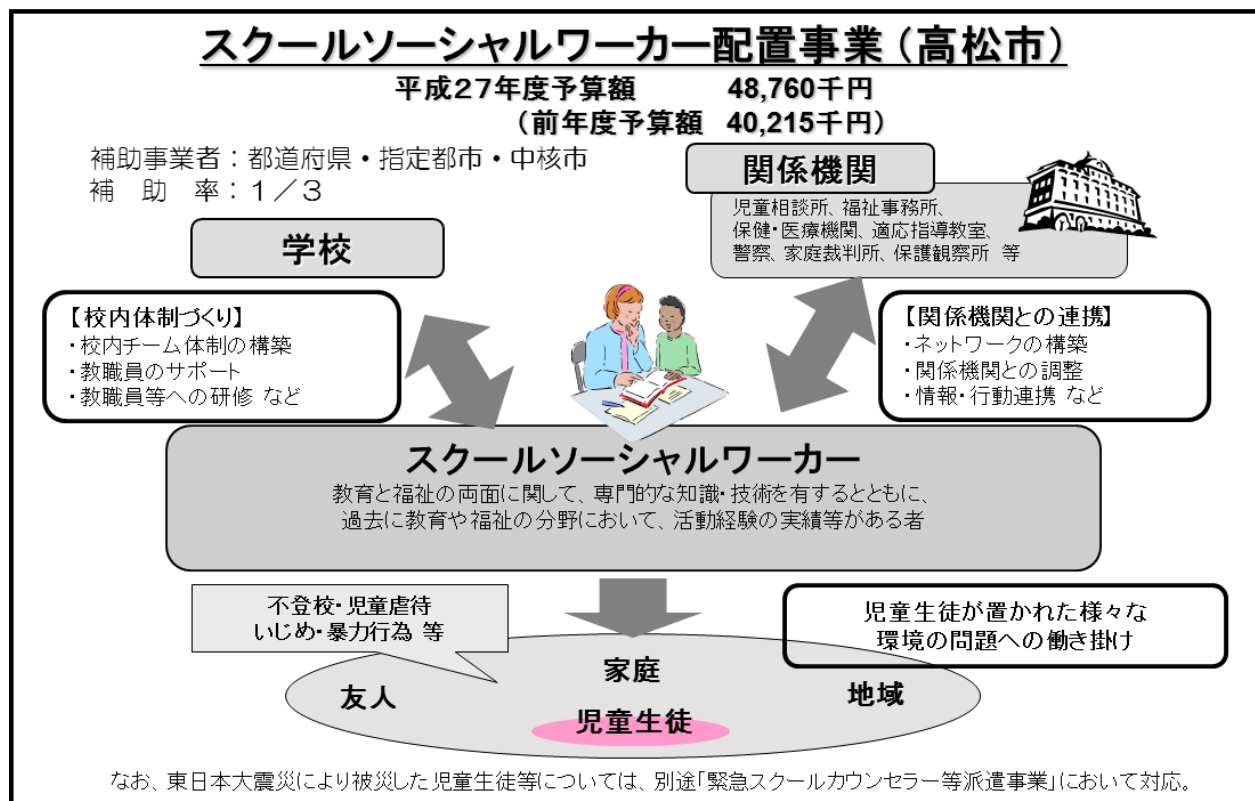


高松市教育委員会

【1】平成27年度スクールソーシャルワーカー配置事業概要



【2】スクールソーシャルワーカーの推進体制について（平成26年度国への報告）

1 スクールソーシャルワーカー配置の主な目的

スクールソーシャルワーカーの社会福祉等の専門的な知識と技術を用い、児童生徒を取り巻く環境を整備することで、問題行動等の未然防止や解消を図る。また、問題解決の過程を通して、中学校で問題行動等が発生しないシステム作りを行う。

2 配置計画上の工夫

高松市教育委員会学校教育課が指定した全中学校にスクールソーシャルワーカーを配置している。また、中学校区の小学校からスクールソーシャルワーカーの派遣希望があった場合には、必要に応じて、当該小学校を校区とする中学校に配置されているスクールソーシャルワーカーを派遣している。

3 配置人数・資格・勤務形態

〔配置人数〕 9名

〔資格〕 社会福祉士等の資格を持つ者又は、福祉と教育の両面に関して、専門的な知識・技術を有するとともに、優秀な活動実績等がある者

〔勤務形態〕 原則1日6時間、週5日程度とする。

4 業務内容

社会福祉等の資格を有するスクールソーシャルワーカーを全中学校に配置し、専門的な知識や技術を用いて、児童生徒が置かれた様々な環境に働きかけたり、関係機関等のネットワークを活用したりして、問題解決を図る。

スクールソーシャルワーカーは、配置された中学校では、生徒及び保護者への支援、教職員から求められる内容に応じ、教職員への支援、関係機関等との調整等を行う。また、派遣された小学校では、教職員研修での講話、校内支援体制への助言、事例検討会での助言等を行う。

5 スクールソーシャルワーカーの活用事例

【事例1】対人関係に課題を持つ不登校生徒に登校を促すための活用事例（③）

担任・保護者からスクールソーシャルワーカーに、不登校生徒Aに対しての関わり方に関する相談があり、スクールソーシャルワーカーが情報提供したケースである。定期的に学級担任と家庭訪問をするが、Aとの面談については、本人の意志を最大限に尊重し、徐々にAの悩みや思いを聴くようにした。

そうするうちにある時Aから、登校の意向はあるものの、他者からどのように思われているかが、登校の妨げとなっていることを聞き出すことができた。スクールソーシャルワーカーは不登校を取り巻く社会環境や対人関係づくりのポイントなどをAや保護者と話し、A本人が、今後どうありたいかについて話し合った。結果、Aは充電期間として家庭で過ごすことを選択したため、家庭でできる活動をスクールソーシャルワーカーと一緒に考えた。

Aは料理に興味を持っており、担任やスクールソーシャルワーカーが訪問する際、何度か料理やお菓子を作ってもてなすようになった。そうするうちに「美味しいと言ってくれる人がいるから、料理を作るのが楽しみになる」との感想を述べるようになった。そして年度末が近づく頃、新学年からの登校を考えるような変化が現れてきた。関係教員やスクールカウンセラーをはじめ、不登校対策委員会等で、生徒の様子や活動について情報共有しながら、連携して取り組んだ事例である。

【事例2】発達障害の疑いのある生徒に対し、対人スキルトレーニングを活用した事例（⑥）

生徒Bは発達障害の疑いがあり、学校や日常生活において対人トラブルが頻繁にあった。部活動顧問からスクールソーシャルワーカーへ相談があり、定期的な面談を実施した。Bは、人から何かたずねられるとすぐに応えることが苦手であるなど、コミュニケーションについての悩みを有していた。また、それを何とかしたいとの思いがあった。

スクールソーシャルワーカーとの面談では、コミュニケーションに関するカードゲームを取り入れた活動を行った。ゲームをする中で、発想や応答の仕方などを話し合った。関係教員とは、様々な支援方法や生徒が関わる医療情報など、支援に関する情報を生徒指導委員会等で共有した。

相談者の様子などを関係教員に伝え、連携しながら活動し、相談者のニーズにかなう支援、相談者を主体とした支援に留意した。最初の面談から5ヶ月後、生徒は「（対人面の対応で）あまり困らなくなった」との感想を持つようになった。

6 成果と今後の課題

（1）スクールソーシャルワーカー活用事業の成果

スクールソーシャルワーカーが関わる「継続支援対象児童生徒の抱える問題と支援状況」のうち「問題が解決」及び「支援中であるが好転」の件数の全体に占める割合は、平成26年度は30.6%であった。年度をまたいで地道な継続支援をしているケースが多数あり、スクールソーシャルワーカーの役割は、学校で欠かせないものとなっている。

また、スクールソーシャルワーカーが扱ったケース会議の件数も増加していることから、学校のスクールソーシャルワーカーの活用頻度が高くなっている状況もうかがわれる。

（2）今後の課題

本市では、現在、スクールソーシャルワーカーが未関与のケースが数多くあり、学校現場からは、その拡充が強く望まれている。今後、国の動きと併せて、本事業を拡充し、1中学校区に1名の配置を目指したい。